

## 儒教のかたち こころの鑑 日本美術に見る儒教

サントリー美術館（六本木） 24. 11. 27～25. 01. 26



狩野探幽 《名古屋城本丸御殿上洛殿襖絵 帝艦図 露台惜費》1634年 重文  
鈴木春信 《五常義 一枚》 1767年 右図

「儒教」は、紀元前6世紀に中国で「孔子」とその弟子たちが唱えた思想で、日本には4世紀に伝来したといわれ、古代の宮廷で享受された。中世になるとこの「儒教」は、禅宗寺院でも重要視され、近世以降は江戸幕府が積極的に奨励して、日本各地で身分を問わず、その教育に「儒教」が採用され広く浸透してきた。理想の君主像を表した大画面の《帝艦図》は為政者の空間を飾り、「鈴木春信」が五常をテーマに「錦絵」を制作するなど、多くの人々が手に取る「浮世絵」の題材にも儒教思想が反映されていった。日本美術の名品に宿る、当時人々が心の「鑑（かがみ）」となる思想は、現代の我々にも新鮮な気持ちもたらしてくれるだろう。



狩野探幽 《桐鳳凰図屏風》 17世紀 六曲一双 紙本着色 部分

鳳凰は、龍・麟・亀と共に「四瑞」として尊ばれた中国の空想上の生物で、この屏風では右隻につがいの鳳凰と雛鳥を描いて親子の情愛を表し、左隻に雌雄の鳳凰が親密に視線を交わす様子が描かれている。総金地の背景にゆったりとモチーフが配され、聖人が世を治めるときに現れるとされた鳳凰に相応しい画面となっていて、1657年7月の四代将軍「徳川家綱」の婚礼のために制作された可能性が指摘されている。